[研究ノート]

ベトナム語オンライン授業の覚え書き

Observations on teaching Vietnamese online

田原 洋樹, グエン・ホアン・ミン
Hiroki Tahara, Nguyen Hoang Minh

立命館アジア太平洋大学
Ritsumeikan Asia Pacific University (1-1, Jumonjibaru, Beppu-shi, Oita 874-8577, Japan)

要旨：2020 年、立命館アジア太平洋大学は、新型コロナウィルスの世界的な感染拡大を踏まえて、会議システム Zoom を利用したオンライン授業を実施することになった。本稿では、オンライン化へ向けた全学的な議論と教学施策を記録し、ベトナム語オンライン授業の経験を振り返って今後の展望を述べた。

Abstract: This paper describes how on-line lectures of Ritsumeikan Asia Pacific University were realized, especially the course of Vietnamese as a foreign language.

キーワード：オンライン化、ハイ・ブリッド方式、ベトナム語
Keywords: online teaching, hybrid learning, Vietnamese

1. はじめに

立命館アジア太平洋大学（以下、APU）は、新型コロナウィルスの世界的な感染拡大を受けて、2020 年度春セメスターのすべての授業をオンラインで開講した。また、秋セメスターには、講義科目の一部について教室での対面授業とオンライン開講のいわゆる「ハイブリッド式」で実施している。

本稿は、大学の教務政策としてのオンライン開講への舵切りの様子と、筆者らが担当したベトナム語オンライン授業の光と影を「覚え書き」として記録するものである。そして、短期間とはいえ、初めてのオンライン授業によって得られた知見から、今後の展望についても述べおきたい。

2. コロナ禍におけるオンライン開講への舵切り

APU で大学運営に責任を持つ議決機関は大学評議会である。「オンライン授業」「Zoom システムを利用」など、我が国において新型コロナウィルスが最初に確認されてから 1 年以上が経過した今日では当然視されている語句が、審議および議決を経て、正式に運用され始めたのは 2020 年 3 月 10 日の大学評議会以後である。

この会議では、まず 2020 年度春セメスターの開講日変更が議論された。各国の出入国政策が目まぐるしく変化し、さらに国際線航空機の運行スケジュールが極めて不透明であり、留学ビザで日本に入国し、APU に入学してくる新入生の渡航日程が決まらないことや、出身国に一時帰国している国際学生[1]の再来日にも多くの問題が生じていることにより、当初予定の 4 月 8 日開講が困難になったからである。同時に、単位認定に必要な授業時間を確保しつつ、対面授業に代わる授業提供のシステム構築や授業準備に最低限必要な時間を捻出するべく、開講日をひとまず 4 月 22 日とすること、ゴールデンウイーク前の 1 週間をオリエンテーション期間として授業を行いながら「慣らし運転」し、明けて 5 月 7 日をもっ

[1] APU では留学ビザで入学する学生を国際学生と呼ぶ。

て正式に開講とすることになった。

合わせて、授業の提供方法については、オンライン会議システム Zoom を導入し、原則としてすべての開講科目のオンライン化を追求することが決定された。本学のみならず、多くの大学において同期型でかつ双方向性を確保したオンライン教育の手段として Zoom が選ばれた背景には、錦織ら(2020)が述べるように「Zoom は直感的に利用方法をマスターできることが強みで」あり、「いつもと同じ授業時間に、いつもと同じ教員が、いつもと同じ内容を、対面の授業ではなく Zoom を使って教える、という形は、オンライン教育に不慣れな教員には想像しやすい」点に依るところが大きいだろう[2]。

さて、この決定を受けて、大学内の教育活動に責任を持つ教学部（他大学の教務部に相当）は、極めて短期間でのシステム導入、環境整備という大きな課題を背負うことになり、教員はオンライン化のための授業の再設計、シラバスの再執筆や成績評価のしくみの再検討など、いくつもの「再」を抱えることになった。なお、職員についても触れておくと、教員がこれらの「再」を自宅や個人研究室で練ることができるのに対して、学生の個人情報を含む、極めて機微なデータを「いじり」ながら作業する必要があるので、オフィス内における執務机の分散化は当然として、会議室、図書館、カフェテリアなど学内の諸施設への臨時移転によるオフィス内人員の密集回避、テレワークの推進など、ソーシャルディスタンスの確保に工夫した。さらに、当時は小学校なども休校措置が取られたので、子連れ出勤環境を急きょ整備すべく、学内には「子どもを見ながら、執務できるスペース」が設けられた。保護者の目のみならず、新たに雇用された監督者による安全および衛生確保があり、子どもたちはいきいきと過ごしていた。

この緊急事態を「学生の学びの機会を保証した未来型の APU 教育構築に向けた貴重なイノベーション機会である」と捉えた教学部は、3 月 19 日に「オンライン会議システム"Zoom"の正課科目導入に向けた基本方針について」をメール議決に付して、基本事項と実際の運用方針の骨子を決めている。

<方針に先立って確認すべき基本事項>

・多文化協働学修の環境は APU の特長であって、あくまでオンキャンパスで混ざりながら授業・教育が展開されることが前提であり、これを変えるものではないこと。

・可能な限り学びの機会を保証し、学びの提供を止めないためのツールであること。

・したがって、オンライン授業の実現によって、学生・教職員がキャンパスに来る必要がない、来なくても良いという考え方にはなく、すべての学生・教職員がそれぞれ自由な場所で授業を提供・受講できる前提にはないこと。

・未来志向の教育環境を作る貴重な取り組みであり、創意工夫とプラクティスを積み上げていかなければならないが、一方で法令等に即した運用も必要となることから、秋以降の運用については慎重に検討すること。

実際の運用方針について定めているのが以下の表現である。ただし、感染拡大阻止に目途が立たず、第 2 クオーターもオンライン開講を維持することとなり、最終的に春セメスターは全科目が開講期間全日程を通してオンライン開講となった[3]。

<zoom 導入にあたっての基本方針>

(1)導入対象科目

[2] 錦織ほか「オンライン教育の展開における学修弱者への配慮」『医学教育』, 2020 年 51(3), p.309.

[3] 秋セメスターについて、対面授業再開を模索する期間となり、講義科目の一部では、教室での授業とそれを Zoom でリアル発信する「ハイブリッド」形式が導入された。

2020 年春セメスター開講科目のうち、セメスター開講および第 1 クオーター開講の全科目とし、第 2 クオーター科目については対象外とする。なお、言語科目については別途検討の上、対象科目とするか決定する。科目の性格上、オンラインによる授業実施が困難な科目については学部長・センター長・教学部長と協議の上、対応を決定することとする。

(2)導入期間

今次の Zoom の導入は、新型コロナウィルスの影響による緊急的措置であり、オンラインとして実施する授業については開講後 3 週間分とし、5 月 13 日（水）以降は通常の授業で実施することとする。Zoom による授業の 1 コマの授業時間については通常の授業と同様に 95 分とする。

(3)シラバスについて

シラバスについては、5 月 12 日までの Zoom による授業内容を踏まえ、各教員が修正のうえ、初回授業において学生において説明を行うこととする。

(4)オンライン授業の実施場所

導入当初にはさまざまなトラブル等も想定されるため、それらに即時対応する必要性から、原則として教員研究室にて行う。なお、教員研究室を持たない教員については通常利用している教室を割り当てるが、これらの教室での学生の受講は認めないこととする。

また、遠隔地在住の非常勤教員による授業については、教員本人からの申し出を受け、教学部長の判断によりキャンパス外での授業実施を認める場合がある。なお、教員研究室で授業を行う教員に対しては Web カメラとヘッドセットを貸与し、教室で授業を行う教員については教卓に Web カメラとヘッドセットを配置する。

(5)テキストについて

学生に対しては遅くとも開講日である 4 月 22 日（水）より 1 週間以内に別府へ戻り、経過観察を行いながら 5 月 12 日（火）までオンラインで授業を受けるように周知する。テキストについては学生が別府に戻ってきてから生協で購入することを想定しており、教員に対しては現在のシラバスに記載してあるテキストからの変更は求めないこととする（教員が希望する場合は認める）。

ただし、4 月 22 日（水）より 1 週間以内に戻ることが困難な学生がいる可能性があるため、4 月 22 日（水）からの 1 週間についてはテキストを使用する機会を少なくしてもらうように教員に依頼する。

(6)配布資料等について

配布資料等がある場合は原則として教員が準備の上、オンラインで提供する。ただし、大量の資料の PDF 化などが必要な場合についてはアカデミック・オフィスでサポートを行う。

(7)中間試験について

第 1Q 科目で 5 月 13 日（水）以前に中間試験を実施する予定の科目については原則としてレポートなど試験以外の評価方法で成績評価を行うこととする。

(8)学生のキャンパスでの受講について

オンライン授業実施期間中、学生がキャンパスにてオンライン授業を受講することは原則として不可とする。なお、Wifi 環境にない学生に対しては濃厚接触とならないように配慮した上で F 棟教室を中心に教室を開放することとする。オンライン授業を受講するために必要な端末を保持していない学生に対しては MMR、IPS、CAI[4]を開放することとする。

(9)教員・学生に対しての支援体制について

Zoom の導入にあたり、教員・学生それぞれに対してマニュアルを整備する。

[4] いずれも教室名称の略。MMR はライブラリー内の Multimedia Room、IPS は Information Processing Seminar Room、CAI は Computer Assisted Instruction Room を意味する。

教員に対しては説明会を実施するとともに、開講までに Zoom を実際に使用できる期間を設ける。また、導入後に質問やトラブルが発生することを想定し、Zoom の利用をサポートする学生スタッフを育成し、トラブル発生時に迅速に対応できる体制を整える。

さらに、4 月 20 日の臨時大学評議会では、「春セメスターの学年暦の変更について」が審議、議決されて､授業提供スケジュールや期末試験の実施などに関して大規模に変更することが決まった｡以下は、この変更を全教員に知らせる文書の一部である。

<変更に伴い必要となる対応>

今回の変更により、開講期間が当初予定より短縮されるため、通常の授業週を確保することができなくなる。本来であれば大学設置基準にて定められた授業時間分（1 単位あたり 15 時間）の授業を行う必要があるが、今回の新型コロナウイルスの感染を受け、文部科学省も 3 月 24 日に「令和 2 年度における大学等の授業の開始等について（通知）」において、授業回数について一定程度柔軟に対応することを認めている。通常の学年暦ではセメスター開講科目については 14 週の授業週（授業は 14 回）と 1 週の試験週、クオーター開講科目であれば 7 週の授業週（授業は 14 回）と 1 週の試験週としている。今回の変更により、セメスター開講科目については 13 週の授業週（授業は 13 回）、第 1 クオーター科目については 6 週の授業週（授業は 12 回）、第 2 クオーター科目については 7 週の授業週（授業は 14 回）のみとなるため、1 単位あたりの学習時間を確保するために以下の対応を行う。

(1)試験週の廃止

可能な限り授業週を確保するために試験週を確保することが難しいため、試験週については設定しない。期末試験を実施する場合等については各科目の授業週の中で行うこととする。

(2)授業内容の変更（全科目共通）

通常の学年暦と比較して授業回数が少なくなることから、各回の授業において追加課題（リーディングなど）の設定など授業内容の変更をおこなう。

(3)オンラインでのガイダンス実施

5/7（木）以降の Zoom によるオンラインでの授業実施を見据え、4/22（水）～28（火）の期間において当初予定されていた各科目の初回授業において受講生に対して Zoom 上でガイダンスを行う。ただし、当該期間中はキャンパスへの入校を禁止する期間となっており、Zoom を使用できない学生も一定数存在することを想定し、実際の講義は行わないものとする。なお、ガイダンスにおいては授業の進め方やテキストの説明などを行うとともに、教員・学生の両方が Zoom を実施に使用し、Zoom の動作状況や接続環境を確認する場として位置付ける。学生に対しては 5/7（木）以降に円滑に授業を受講するためにガイダンスに参加するように強く推奨する。

<今後の検討事項など>

・言語科目については通常の講義科目と異なり、1 単位当たりの授業回数が講義科目の倍必要であるため、上記以外の対応について別途検討を行う

・授業週の短縮により、1 回の授業に対して講師料を支払っている非常勤講師については不利益が発生するため、補償等について別途検討を行う

・manaba への負荷増大が懸念されるため、検証等を進める

オンライン化と書けば 6 文字に過ぎないが、教員は授業内容の練り直しや教材再作成に忙殺され、授業を支える教務部門のスタッフはシステム構築に心身を磨り減らしたのである。

目の前に学生がいない環境でいかに授業を運営していくのか、講義しながらパソコンをどのように操作していくのかなど、教員が戸惑いがちな点については、教学部が雇用した学生アルバイトを受講生に見立てて模擬授業する機会があった。声の聞こえ方、共有画面の見え方など、文字通り学生目線の感想やアドバイスを得ることができて、大いに助けられた。

3. ベトナム語授業のオンライン化に向けて

APU 言語教育センターが提供する言語科目は 8 言語である。うち、必修の日本語および英語を除いた 6 言語が「AP 言語科目」と位置付けられ、中国語、マレー・インドネシア語、韓国語、スペイン語、タイ語、ベトナム語が含まれる。

ベトナム語を担当するのは筆者らとチャン・トゥイ・ヴィン講師の 3 人である。田原は 2 月 20 日に出張先のベトナム・ホーチミン市から帰国、3 月中旬に予定していた出張をキャンセルして開講に備えた。また、ミンは休暇を利用してホーチミン市の自宅に帰省中であったが、ベトナム政府が出入国停止措置を取る直前のタイミングで再来日、別府に戻ることができた。他方、ヴィンは再入国が間に合わないため、ホーチミン市の自宅から Zoom で授業を行うことになった。

従って、開講前のベトナム語担当者打ち合わせも Zoom で実施した。打ち合わせの中で、通常は生協書籍部で冊子販売としている教科書については、PDF 形式で受講生に無料配布して、コロナ禍の学習に便宜を図ること、中間試験および期末試験は筆記形式ではなく個別の会話試験とすることを決めた。また、通常授業では、学生は教室内のホワイトボードを利用して作文を書き、提出物も手書きで作成するが、オンライン開講に伴ってパソコン上でのやり取りに移行するために、ベトナム語入力ソフト unikey[5] のインストールや入力方法などをオリエンテーション期間中に指導することも確認した。

また、授業は、APU 全学方針に基づき、時間割通りに教室ないし教員の個人研究室（または自宅）からリアルタイムで発信することとし、田原は自宅で[6]、ミンは教室で授業を行うことになった。

4. オンライン授業の光と影

リアルタイムで授業を行うことを確認した後は、授業で使うパワーポイントを作成することと実際に授業をすることの、いわば自転車操業の日々が始まった。

接続を確認するために、授業開始 5 分前には Zoom のミーティングルームを開けた。授業は定刻に始めて、冒頭では音声やカメラの確認を兼ねて受講生全員に対して個別にベトナム語で話しかけて出席を取った。授業時間中はカメラをオンにしておく、通信事情により「Zoom 落ち」した場合には欠席扱いにしないので慌てずに復帰してくることなど、オンライン授業のルールを周知した。学生の反応はおおむね好意的であった。体調不良でカメラをオフにする場合には事前に連絡を入れて教員に許可を求めるといった新しいマナーも生まれた。チャット機能を利用して「トイレに行ってきます」「宅配便を受け取ってきます」などのコミュニケーションも取り合うようになった。一度も顔を合わせたことがない受講生同士、そして受講生と担当教員間にも自然とあたたかい人間関係が醸成されるようになった。

Zoom によるオンライン授業の長所は、時間通りに授業が始められること、早朝の 1 時限目や最終校時の 6 時限目でも遅刻や欠席がほとんどないことである。前者については、教室での授業でも担当教員の心がけ次第であるが、実際に授業開始時刻ちょうどにスタートするのは難しい[7]。Zoom の場合はパソコンに表示されている時計に合わせて、クラスの雰囲気や学生の準備状況に左右されることなく、「機械

[5] フリーソフト。http://unikey.vn/vietnam/.
[6] 大分県外に居住していて、県境を跨ぐ移動の自粛が要請されたために、出勤が困難になった。
[7] 筆者（田原）の長い学生時代を振り返って、定刻開始を徹底されていたのは原誠先生のみ。スペイン語専攻の学生には当然のことだったのかもしれないが、他学科から聴講した筆者には衝撃的なカルチャーショックだった。

的に」スタートできる。2 週目には、学生は定刻前にミーティングルームに入るようになり、受講生全員が揃って定刻に授業を開始できるようになった。

さらに、語学授業のツールとして優れているのは、学習者が教員の口元を容易に見られることであろう。今回の授業経験では、特に初修クラスの発音指導において効果を発揮した。学習者は照れや緊張感なしに、教員の口元を観察することが可能になった。しかも学生のパソコンのモニターに映る教員の顔は、教室で見るよりもアップである。バーチャルだからこそ得られる至近距離であり、実際の教室ではそれぞれの学生の前にこれほどアップで立つことは不可能である。教員にとっても同様に、学生の口元がよく見えるようになり、発音指導を効果的に実施できた。

オンライン化によって学生の発音指導が難しくなるだろう、クラスでの授業に比べて学生の発音は上達しにくいだろうという筆者らの予測は、よい方向に外れた。

また、定期試験は通常は教科書の内容に即した筆記試験(80%)と面接試験(20%)をセメスター中間と期末に実施していたが、今年度はオンラインでの面接試験のみとした。内容は、教科書の音読、教員との会話で、いずれも問題を 3 パターン用意した上で試験 10 日前に公表した。面接試験の冒頭に、教員が試験パターンを選び、学生に出題した。

さて、オンライン授業の短所については、特に論う意図はないが、「無駄がない」ことに尽きるのではないかと考えている。先に、クラスの雰囲気などに左右されず、「機械的に」授業を開始できると書いたが、果たしてそれが効果的なのか、不安である。というのは、学生は通学時間が無くなった分だけゆっくり寝ているし、人前に出るわけでもないから、洗顔や着替えなどの身支度も省力化できる。朝起きてから外の空気を一度も吸うことなく、寝床からモニター前に直行できる。午後の授業にしても、教室間移動がないために、やはり朝から「寝起き」気分が続いている学生も散見される。だから、オンライン化による定刻開始がニューノーマルとなるのは好ましいが、通学時間や教室間移動のようなアイドルタイムを意識的に設ける必要があると考えるようになった。

そこで、筆者らは授業開始前の時間にベトナム音楽のクリップを流すことにした[8]。ベトナムには関連がある、しかし授業には直接の関係がない、いわば「ちょうどいい無駄」な時間の演出を心がけた。授業開始後に音楽や映像について話したり、メールでやり取りしたりと、授業前後の教室内の自由な雰囲気を再現してみた。

通常、オンキャンパスの授業でも授業中にベトナム音楽を流して小休止を取ることがある。取り上げる音楽は現在のベトナムで人気があるポップスではなく、筆者（田原）の研究テーマである「ボレロ」と呼ばれるジャンルで、1975 年以前の旧南ベトナムで流行した楽曲である。若者の音楽的嗜好に合致しているとは言い難いのだが、学生は授業中に聞いた音楽の話題をベトナム人留学生に持ち掛けることで、ベトナム音楽シーンの最新情報を得てきて、次第に音楽のリクエストを出してくる。当然、リクエストには応えるので、学生たちは自分のリクエスト曲がかかるのを楽しみに教室へやってくるし、ベトナム語履修中の学生とベトナム出身の学生が音楽を介して交友を広め、教室とベトナム人留学生コミュニティも繋がりを持つようになる。ただし、残念ながら、オンライン授業ではこの広がりまでは得られなかった。

5. 気配を伝えることの難しさ

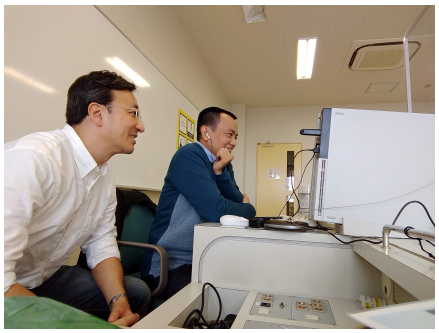
Zoom を利用したオンライン授業は、全学的に見てひとまずは成功を収めた、というのが、学生および教職員間の共通認識である。本学内のみならず、この間に発表されている論文や実践報告の多くには、元来保守的で、急な変革にアレルギー反応を示しがちな高等教育の現場が、これほど短期間に、これほ

[8] 幸い、筆者らには音楽家や歌手の知人が多く、彼らの好意に甘えることで、著作権をクリアすることができた。

ど劇的な対応を迫られて、それを乗り切ったことについて、かなり好意的な表現が見られる。

このような「オンライン授業賛歌」に光を奪われてしまった、オンキャンパスでの授業の光、すなわち長所は何か。ややリリカルな言いかたが許されるなら「人影があること」だと考えている。逆に言えば、オンライン授業では教員も学生も、自分以外の存在を意識することが難しく、孤独感を抱きしめながらパソコンのモニターと「睨めっこ」しなければならなかった。セメスターの進行に合わせて、筆者らは「人影を見せる」ことや「気配を感じ合う」ことを意識するようになった。具体的に述べれば、筆者らが特に留意し、工夫したのが次の点である。

第一に、教員同士が緊密に連絡を取り合い、授業運営している姿を学生に示した。APU のベトナム語は、各レベル週 4 回の授業[9]で、いずれも 2 人の教員によるペア授業である。2 人の担当者が進度や展開について常時連絡を取り合うことは、授業に対する学生の信頼を高めることに直結する[10]。したがって、授業前後に進度や授業内容を連絡し合い、学生の学習状況について細かく情報交換するように心がけた。また、緊急事態宣言の合間を縫って 2 人が教室に入り、ひとつの授業を 2 人で実施して、教員同士が良好な人間関係を持っている様子を見せた。オンキャンパスであれば、学生たちには、ベトナム語担当者がカフェテリアで打ち合わせを兼ねて食事を取っているのを見たり、学内で談笑している姿を見かけるチャンスがある。また、例年春セメスターに開催されるベトナム文化紹介週間『ベトナムウィーク』の準備作業をする学生たちと教員が楽しそうに話す姿を見て、学生は教員のさまざまな表情を知ることができる。これに代わり、筆者らが教室内でベトナム語を話す様子を発信し、同じ時間、同じ空間に 2 人が揃って授業を行う機会を設けた。Zoom 画面に 2 人の教員が映るとき、学生の表情も明るく見えたのが印象的だった。この時間は、学生には質疑応答の時間として与え、ベトナム語はもちろん、英語や日本語でも構わないので自由に発言することを奨励した。その発言を 2 人で受け止め、ベトナム語で協議しあう様子も見せた。



第二に、学生に対して、声を出す時間を十分に与えることである。これは、発音や会話の練習にとどまらず、授業中に質問することや、授業前後にもミュートを解除して発言しやすい雰囲気を醸成することも含めて、である。授業自体も、学生が目の前にいないので、理解できているのかどうかが見えにくく、よほど気を付けないと、教員が一方的に話してしまうことになる。「ここまで分かりますか」「どんな小さなことでもいいから質問をどうぞ」と、初めは日本語で、後にはベトナム語で、小まめに呼びかけを行った。また、授業は定時 10 分前にいったん終了として、残り時間を質疑応答に充てた。初めの 2 週間は質疑応答に残る学生はなく、"Chào tạm biệt."（さようなら）、"Gặp lại nha!"（またね）のあいさつを交わして「退出」をクリックして出ていった。徐々に学生が残るようになり、授業で聞き逃した点を質問したり、自分の母語との相違をコメントしたりと、活発化してきた。語学とは関係なく、ベトナム料理や文化風習に関する質問が出てくることもあり、こうしたやり取りは授業自体の活性化にも大きく役立った。

「無駄がない」ことをオンライン授業の短所として取り上げたが、もっとも困難だったのは「気配を感じる」ことができなかった点である[11]。例えば、教室での授業中にはさまざまな物音が聞こえる。時

[9] レベル 1 から 3 までは週 4 回。レベル 4 のみ週 2 回で、1 人の教師による授業。なお、授業は 1 コマ 95 分である。
[10] ペア授業における担当者間の「連絡不足」は、例えば授業内容の重複、宿題の確認忘れなどにつながり、これが続くとセメスター末に実施する授業評価アンケートで手痛い評価を受けることになる。
[11] 田浦ほか(2020)には「授業中に手応えが得られない」という表現がある。本論では「どこまで理解できているのか」という教育的な意味での「手応え」ではなく、人気（ひとけ）や物音などを「気配」とした。

に、私語や笑い声も聞こえてくる。これらは集中を妨げるような雑音ではあったが、果たして Zoom で教員が発する声以外には何も音が聞こえないのは、心地よい学習環境であったのか。教室で授業をしていたときには、学生の私語、授業時間内の出入り、椅子や机を動かす音に顔を顰めていたが、いま響くのは自分の声だけという居室で授業するのは快適であったのか。教室内なら、机間巡視しているときや学生に個別対応しているときでも、ほかの学生の気配を背中に感じることができたし、グループ練習をさせるときには目はグループ A を追い、耳ではグループ B の様子をフォローすることも可能だった。ブレイクアウトルーム機能は確かに便利であったが、教室では当たり前にできた、別の学生の、あるいは別のグループの気配を感じながら、複数の学生を相手に同時展開していくことは不可能だった。

ベトナム語の授業のうち受講生が少ないクラスや、筆者（田原）のゼミクラスなど、学生数が 10 名前後の場合には、自分が発言しないときにもミュートを解除しておくことを提案し、試行してみた。学生たちのマイクは、インターフォンの音、ペットの鳴き声、母親と思しき女性の「ちょっとぉ。焼きそばができているのに、もう。先生、まだ授業やってはるのん？」という大声など、「無駄な」音を拾い続けた。その度に笑いが起き、集中が途切れるのだが、一方で緊張も解けるのであった。学生から「先生、質問してもいいですか」と声が上がるのはこのタイミングで目立つようになった。

考えてみれば、雑音がない、いわば真空状態で会話することは稀で、わたしたちはさまざまな雑音の中で、互いの、あるいは第三者の気配を感じ合いながら生きていて、コミュニケーションしているのである。オンライン授業の当初、決定的に欠けていたのはこの「気配を感じ合うこと」ではなかったのか、自問している。そして教室というのは、これほど愛おしい空間なのかと身につまされることが多かった。

最後に、「実用的な会話練習」という授業のセールスポイントが悲しく感じられたのもコロナ禍における語学の授業の影として記録しておきたい。以下は、ベトナム語 1 の教科書に出てくる会話練習のスキットである[12]。

Hội thoại 3: Nam rủ Takashi cùng đi ăn tối
会話 3:　ナムはタカシを夕食に誘う
Nam : Tối nay anh Takashi đi ăn tối với chúng tôi nhé.
今夜、タカシさん、わたしたちと一緒に夕ごはんを食べに行こうね。
Takashi : Ồ, hay quá. Tôi rất thích đi ăn tối với các bạn Việt.
おお、いいですね。ベトナム人のみんなと食事に行くのは大好きだよ。
Nam. Thế, chúng ta sẽ ăn ở đâu?
じゃあ、どこで食べようか。
Nam : Ở gần ga Beppu. Anh có biết nhà hàng Beppu không?
別府駅の近く。ベップレストランを知っている？
Takashi : Biết. Tôi thường đến đó với ba mẹ tôi.
知っている。そこにはよく両親と行く。
Nam : Vậy hả? Tôi ít khi đến đó nhưng tôi thích món ăn ở đó.
そうなんだ。わたしはあまり行かないけれど、あそこの料理は好きだな。
Takashi : Thế tối nay chúng ta sẽ gặp nhau lúc mấy giờ?
何時に会う？
Nam : Lúc 7 giờ.
7 時にね。

[12] Nguyễn Văn Huệ, et.al, 2020. *Tiếng Việt cho sinh viên APU, Trình độ 1*, 立命館アジア太平洋大学. p.87.

Takashi : Được, lúc 7 giờ. Ăn xong, chúng ta có đi đâu không?
いいよ、7 時ね。食べ終わったら、どこかに行くの？
Nam : Có. Ăn xong chúng ta sẽ đi hát karaoke.
うん。食べ終わったらカラオケに行こう。
Takashi : Nhưng... tôi phải về nhà trước 10 giờ đêm.
でも、夜 10 時前には家に帰らなければ。
Nam : Tại sao? Anh không thích hát karaoke à?
どうして？カラオケは好きじゃないの？
Takashi : Không phải. Tôi thích hát karaoke nhưng tôi thích đi ngủ sớm hơn.
違うよ。カラオケは好きだけど、早く帰って寝たいんだ。

本学のベトナム語教育の特長は、500 人以上在学しているベトナム出身の学生と、ベトナム語履修者を混ぜ合うことにある。母語話者学生が会話のパートナーとして教室に来る時間を設定したり、インタビューを宿題にしたり、学内環境を活かした教育を心がけている。よって、教材に出てくる会話練習のスキットは、ベトナム国内での会話ではなく、学生生活を過ごすキャンパス内や大分県別府市を場面としている。そして会話の内容も、学生のリアルなやり取りを反映させるように工夫した。一緒に食事をする、カラオケに行くなどは、そんな学生生活の一風景である。

しかし、この会話を練習する学生の様子を見ながらハッとした。「ごはん会」もカラオケも、今の世の中では最も非実用的ではないか。のみならず、『自粛警察』には反社会的な教育だと糾弾されかねない内容ではないかと思い、まずは可笑しくなり、そして底抜けに悲しくなった。期せずして「実用」の危うさを痛感するのであった。

6. おわりに

今般のオンライン授業化は、そもそも非常時における授業提供という、いわば緊急措置であったことを忘れてはならないだろう。例えば、山本(2020)は、非常時のオンライン授業について「平常時の授業形態の緊急代替案にしか過ぎず」と述べた上で、今後議論されるであろう平常時のオンライン授業を「遠隔教育、e-learning、面接型授業とオンライン授業を組み合わせたブレンディッド・ラーニングなどの取組み、教育理論、学習理論等の成果を基盤とした人財の育成をミッションとする教育形態の有力な教育方法」と期待を寄せている[13]。

筆者らは「授業のオンライン化に成功した」とついつい思いがちであったが、こうした今後の課題を見るときに、成功したのは単に「授業を Zoom という会議システムを利用して実施すること」であったと自らを戒めている。新型コロナウィルスは依然として猛威を振るっている。「教室のみ」の授業には戻ることができない感すらある。そんなときに、森田ら(2020)の「オンライン授業と従来の対面授業は、相互に代替できるだけではなく、補完し合う異なる教授法でもあり、双方をうまく組み合わせることによってより効果的な教授法になり得ます[14]」という一文は、上に引用した山本(2020)と同様に、新たな挑戦へと導いている。

今後始まるであろう、オンライン授業と対面授業のいわゆるハイブリッド型授業においても、気配を感じ合う授業運営をより意識していきたいと考えている。

[13] 山本ほか「関西大学のオンラインを活用した授業の取組みと課題」『JUCE Journal』2020 年度 No.1, p.8.
[14] 森田ほか「早稲田大学のオンライン授業の取組みと課題」『JUCE Journal』2020 年度 No.1, p.17.

参考文献

欧文

Nguyễn Văn Huệ, Trần Thị Minh Giới, Tahara Hiroki. 2020. *Tiếng Việt cho sinh viên APU, Trình độ 1*, 立命館アジア太平洋大学, 132p.

和文

田浦健次朗ほか. 2020.「東京大学におけるオンライン授業の始まりと展望」,『コンピュータソフトウェア』Vol.37, No.3, pp.2-8.

錦織宏、西城卓也. 2020.「オンライン教育における学修弱者への配慮」『医学教育』, 2020 年 51(3), pp.309-311.

森田裕介、向後千春. 2020.「早稲田大学のオンライン授業の取組みと課題」『JUCE Journal』2020 年度 No.1, pp.17-22.

山本敏幸、岩﨑千晶、柴田一. 2020.「関西大学のオンラインを活用した授業の取組みと課題」『JUCE Journal』2020 年度 No.1, pp.2-10.

執筆者連絡先：tahara@apu.ac.jp, minhnh28@apu.ac.jp

本稿は科学研究費助成事業基盤研究（B）「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」（2018 年度−2020 年度、研究代表者富盛伸夫、研究課題/領域番号 18H00686）の研究成果のひとつとして公開するものである。